

本学の学生による授業評価の現状と課題

－ 学生・教員の意識調査からの分析 －

Current school conditions and issues from class evaluations

－ From the analysis of the feedback survey for students and teachers －

石毛 久美子 垣内 いづみ 小坂 みづほ 百瀬 ちどり
Kumiko ISHIGE Izumi KAKIUCHI Mizuho KOSAKA Chidori MOMOSE

要旨

「学生による授業評価」は大学設置基準の中で義務化され、今日全国のすべての大学で行われている。義務化されたことで、形式的に行っている面も否めない。評価結果が組織的に活用されていないことは多くの大学の共通の課題でもある。本学でも授業評価の結果は教員個人の判断に任されている。授業評価を学生はどのように受け止めているのか、教員は学生からの評価を生かしているのか、現状を調査した。前期の受講学生全員と専任教員を対象としてアンケートを行った。結果、学生たちは授業評価に対して「きちんと回答している」しかし、「評価を教員は受け止めていない」と感じている。一方、専任教員は多くが、学生の授業評価を「真摯に受け止めている」が「授業改善に役立てている」教員は8割程度である。また、組織的な授業評価以外でも学生の感想や反応を得ている教員も4割ほどいる。すべての授業科目で「学生による授業評価」を行っているが、科目により教員の受け止め方は違っている。

これらの結果から、「学生による授業評価」の結果は授業を振り返る資料にすぎず、改善の必要の有無や改善策は教員が自己省察的に判断し、対策を採ることに負かされたままであり、改善されたのかどうかは学生にも他の教員にも不明なままである。その不透明さが学生たちの授業評価を懐疑的な受け止めにさせている。教員も授業方法に不安を持っている者も多い。授業評価を教員と学生のコミュニケーションツールとしても活用し、学生を主体とした授業の展開に結びつけられるような組織的な取り組みの必要性和、現状の「学生による授業評価」の方法の見直しの必要性が示唆された。

【キーワード】 授業評価 授業改善 FD 活動

1. はじめに

「学生による授業評価」¹⁾は1991年の大学審議会答申では、大学設置基準の中で努力義務とされた。本学では1993年に介護福祉学科を開設した際に「学生による授業評価」を導入した。大学設置基準の改正1)により授業評価は努力義務から義務化され、今日では全大学が取り組んでいる。2002年には大学の第3者による外部評価が義務付けられ、大学の認証評価において「学生による授業評価」は公的に位置づけられ、実施が求められるようになった。

本学での「学生による授業評価」は取り方や集計方法、教員への提示については様々な経過を経て平成18年、看護学科の開設に伴って現在の方法になっている。すべての授業科目において、授業終了時に担当教員が実施し、事務局で統計処理した後に教員へ報告がされ、教員はその結果を自己評価する、という形式である。科目ごとに質問項目別、学科ごとの平均点を算出し科目得点を棒グラフに、学科平均を折れ線で表記し、教員にフィードバックされる。教員は担当科目の学生評価を分析評価しFD事務局担当者へ報告する。質問内容に関しても定期的に改

定が行われ、妥当性を検証してきた。現在の評価項目は、「学生自身の授業参加に対する自己点検」と「教員への授業評価」を15項目の質問から聞いている。授業の最終回に授業評価を行うという意識は定着してきたが、授業改善に生かされているのかという点での分析はこれまでできなかった。義務化されたことで、形式的に行っている面も否めない。評価結果が組織的に活用されていないことは多くの大学の共通の課題でもある²⁾。さらには、学生は授業評価として答えているのか、単に教員評価ではないか、という疑問も開始初期から残されたままであった。授業評価の活用に関しても各教員にゆだねられている。その為、授業評価が本来の目的を達成するツールとなっているのか検証が求められていた。

今回、「学生による授業評価」が現在の形をとって10年が経過していることから、学生、教員が「学生による授業評価」をどのように受け止めているのか意識調査を行った。大学教育の質の転換が強く求められている現在、手がかりとしての授業評価を実のあるものとすることは重要である。

2. 調査目的

学生による授業評価（以下 Voice）はどれだけ意識され活用されているのか、その実態を明らかにし Voice の効果的な活用のあり方を検討する資料とする。

3. 調査方法

1) 方法

現在行われている Voice に対して学生はどのように意識付けているのか、教員はどの程度活用されているのか、アンケート調査を行う（アンケートは資料参照）。

学生：前期授業終了時の Voice 配布時に無記名自記式アンケートも同時に配布し調査を依頼する（会場調査）。提出は任意とし、提出場所を指定した。
教員：拡大教授会で趣旨を説明し、各学科ごと委員より協力を依頼し、指定場所への提出とした。

2) 対象者

①専攻科を含む本学全学生

1 年生は初めての Voice であるが、すべての授業科目であることから、前期最終科目の Voice 聴取時に配布した。

②専任教員全員

3) 調査期間

アンケート実施期間

学生：平成 27 年 7 月～8 月

＜前期授業終了時に行う＞

教員：平成 27 年 8 月～9 月

＜学生同様、前期授業終了時に行う＞

4) データ分析方法

①学科ごと、学年ごとに統計的に分析する。

②教員と学生の Voice の受け止め方に意識に差があるのか比較する。

4. 倫理的配慮

調査協力は自由意志であり、拒否しても何ら不利益は無いこと、統計的に処理されるため個人が特定されることは無いことを口頭で説明し、アンケートの提出を持って同意とした。

（研究倫理委員会の承認を得た # 1506）

5. 結果

回答者と回収率は表 1 の通りである。学生は定期試験の後の会場調査であり、概ね協力的であった。看護学科 3 年生は前期授業科目が少なく学科全体としての回収率も低くなった。

表 1 調査対象・回収率

学 科	回答数／在籍数	回収率
幼児保育学科	181／192	94.2%
介護福祉学科	80／86	93.0%
看護学科	155／186	83.3%
専攻科	6／6	100%
専任教員	24／31	77.4%

*在籍数は平成 27 年 7 月現在、休学者を除いた数である。教員は前期授業担当者の数である。

1) 学生の意識

(1) Voice に対する受け止め

学生たちはどの程度、Voice を理解しているのか（図 1）、また、きちんと答えているのかを尋ねた（図 3）。

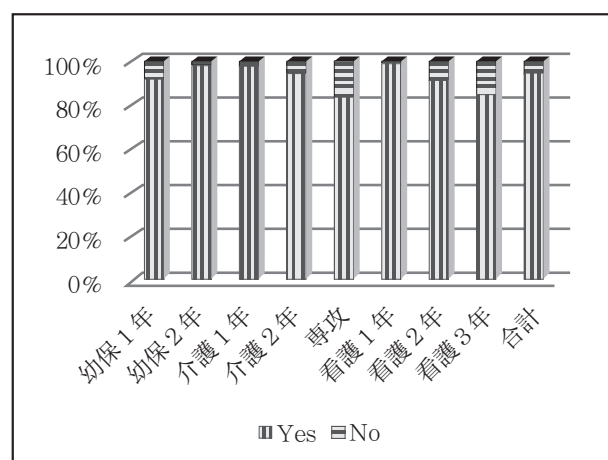


図 1 Voice の説明を受けている

Voice についての説明は毎年度第 1 回の Voice の実施の際に説明を行っている。

授業終了時に Voice を取ることにに関して目的・意義は、説明はしているものの学生たちの意識は高くはない（図 2）。全体としても、意識している学生としていない学生はほぼ、半々の割合である。一方、Voice に対して回答はきちんと答えていると回答した学生は全体で 80% 以上である（図 3）。

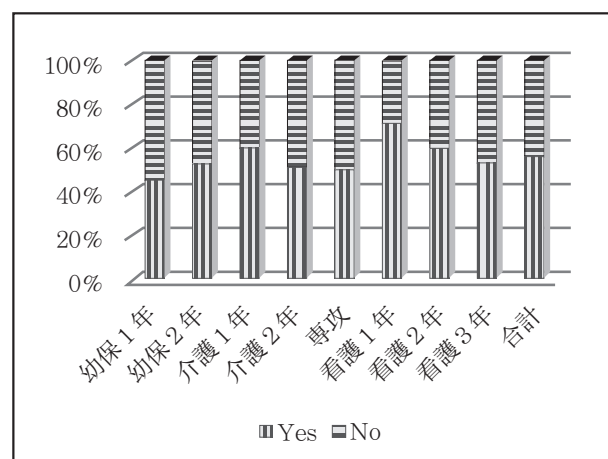


図 2 Voice を取ることを意識している

Voice への回答は学年が進むと、どの学科でも真剣さは低くなる傾向にある。

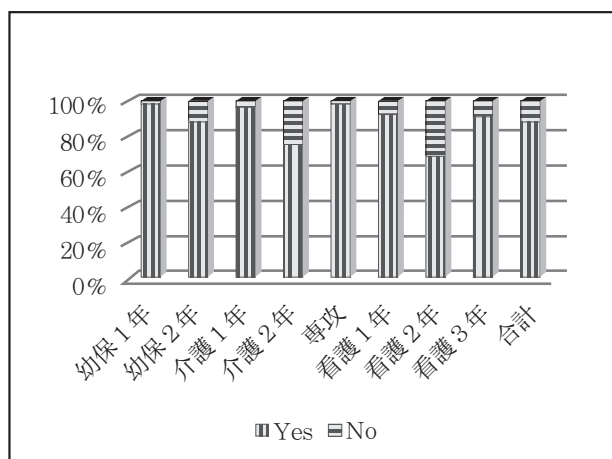


図3 Voice にきちんと答えている

(2) Voice の効果の受け止め

毎回の授業終了時にとっている Voice は教員の授業改善に役立っているのか、また、学生自身は授業の振り返りとして試しているのかを訊ねた。どの学科も学年が進むと役立っていないと答える人数が大きく増加している。また、教員は Voice をきちんと受け止めていると思うか、という設問に対しても学年が進むと厳しい評価が増えている。1年生は入学後初めての Voice であり、前期授業科目の中でも後の授業でのアンケートとしたが、それでも Voice の効果や教員がきちんと受け止めているのかということに対して疑問を感じている（図4,5）。看護学科1年生では40%以上の学生が Voice は役立たない、教員は結果を受け止めていないと感じている。

実際に葉学生たちは、同じ授業を複数回受けているわけではない。それでも、Voice は授業改善に役立っていない、授業評価はセレモニー化しているという感想も書かれていた（自由記述は資料参照）。

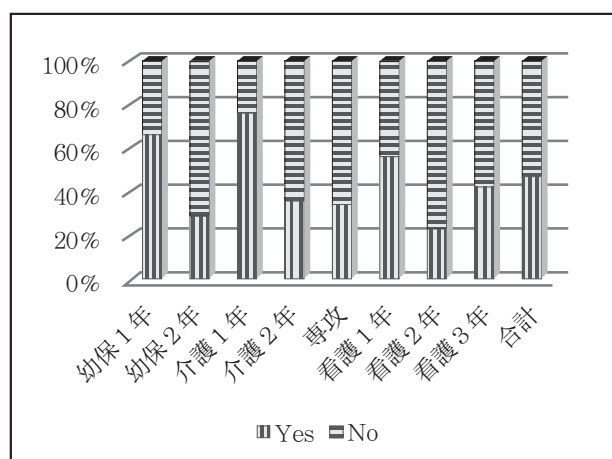


図4 Voice は授業改善に役立っている

前期授業終了時のアンケートであるが、初めて授業評価をする1年生でも40%近い学生が、役立たないと回答している。2年生や専攻科では80%近い学生が役立っていないと感じている。

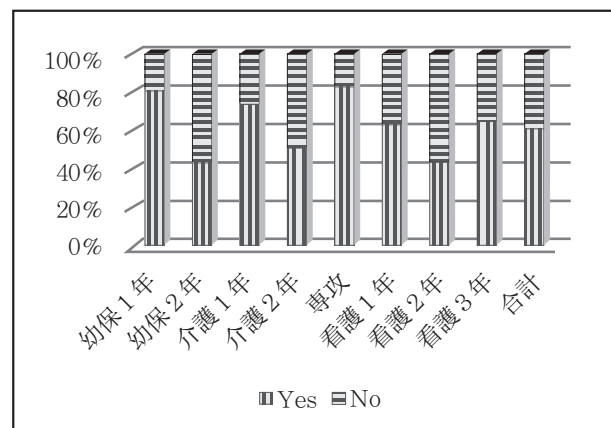


図5 教員は授業評価をきちんと受け止めている

(3) Voice に対する関心

現在全ての授業科目で、終了時に Voice を取っていることから、負担は感じていないか、真剣に答えていると思うか、質問内容についてはどうかを聞いた。

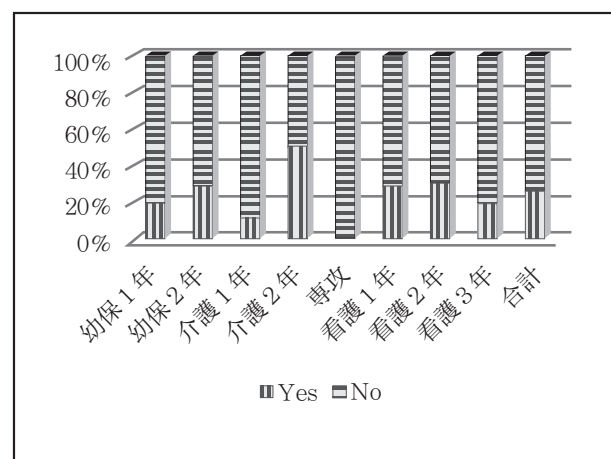


図6 Voice を取ることに負担はあるか

半期毎に集中しており、同時期に、ほぼ毎時間ごとの Voice であるが学生は負担とは思っていない。一方、真剣に答えているのか、という点では、他の学生は真剣に答えていると思っていないようである（図7）。

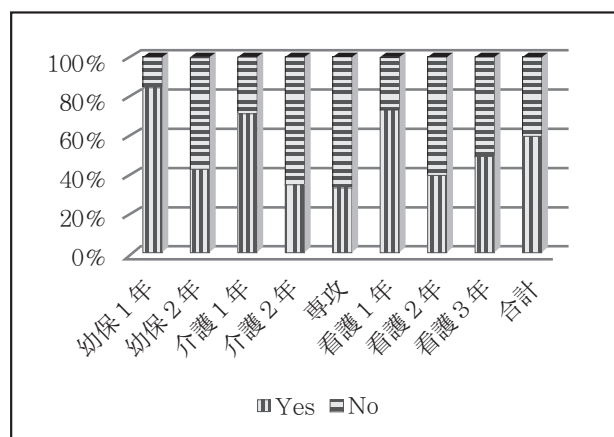


図7 学生はVoiceに真剣に答えている

Voiceで聞いている内容については、80%の学生が適切であると答えている（図8）。授業評価はVoiceでなくても良い、と考えている学生も半数以上おり、授業評価はVoiceでなくても良いという学生が大多数を占めている（図9）。

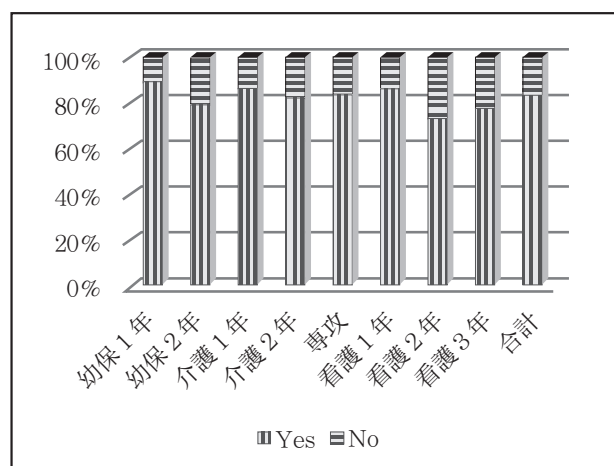


図8 Voiceの質問内容は適切だと思うか

マークシート方式では、言いたい事が伝わらないと感じている学生も少なくない。自由記述が欲しい、直接に声を伝える方法が欲しい、という要望もある。

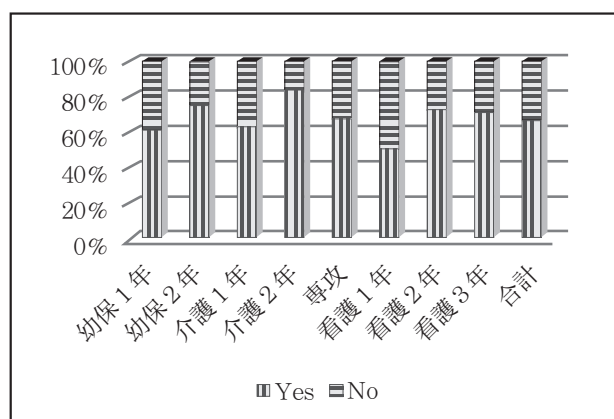


図9 授業評価はVoiceでなくても良い

Voiceの変更や改定に対して学生は興味があるのかを聞いた設問に対して、20%程度ではあるが興味を示している学生もいる（図10）。

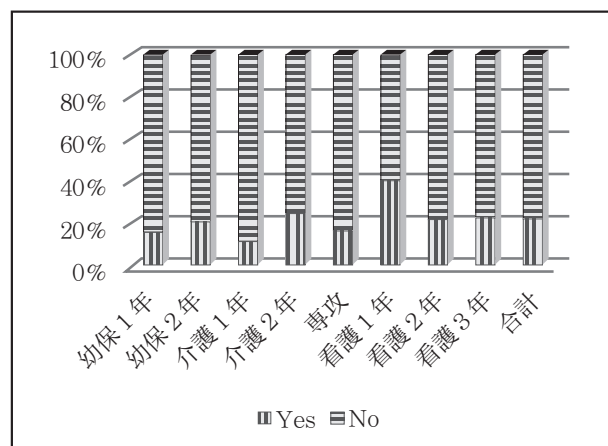


図10 Voiceの作成に参加したいと思うか

2) 専任教員の意識

専任教員31名を対象にアンケートを配布し、24名から回答を得た。回収率は77%である。結果は図11の通りである（質問内容は資料を参照のこと）。

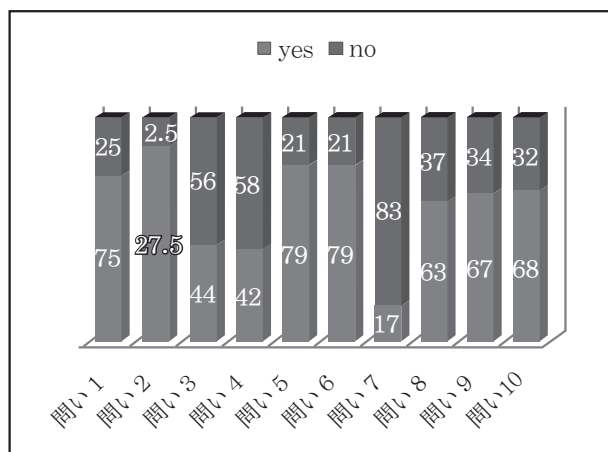


図11 教員の意識

現在、授業科目全ての終了時、Voiceを行なっているが、その点に関しては負担とは感じていない（問い7）。しかし、Voiceを真摯に受け止め（問い2）、授業改善に役立てている（問い5）教員は70%から80%に過ぎない。授業科目の内容、講義と演習ではVoiceの受け止め方が違う（問い3）。授業評価はVoiceでなくても良いと感じている（問い8）、現在のVoiceは改善したほうが良い（問い10）と感じている教員も40%ほどいる。実際にVoice以外の方法で評価を得ていると答えた教員（問い4）も40%いる。日頃の授業方法に不安を感じている（問

い9) 教員もまた40%近くいる。

6. 分析・考察

学生による授業評価は、現在の形式を取るようになり10年が経過した。近年、取るだけのものとして形骸化してきているのではないか。授業評価を効果的に活用し授業改善に役立てる組織的な取り組みが必要ではないか。そんな疑問から、見直しの手掛かりとして教員、学生に意識調査を行った。

Voiceを行なうことについては、教員も学生も現状の形式で大きな負担とは思っていない。しかし、Voiceが役立っているのかという点では、学生たちは評価していない。学年が進むとそれが明確になっている。授業評価が義務となり、全ての大学で学生による授業評価が導入されているが、評価内容や方法は各大学の裁量である。多くの大学では、授業評価の結果は教員の個人レベルに委ねられていることが殆どである。本学でも、組織的には授業評価の実施と集計までで、評価を授業や日常的教育活動にどう活かすのか、どう活かされているのかまでは組織的には取り組まれていない現状である。授業評価は「取るだけのもの」として学生には受け止められており、教員もまた全員が真摯に、学生の声を受け止めていないことが判明した。特に教員は、担当科目によっては受け止め方が違うと答えている。学生たちはきちんと回答していると答えているが、一方では、学生全体としては真剣には答えていないのではないかという思いも持っている。それが教員の受け止めにも影響がないとはいえない。実際に、Voiceの結果は授業を振り返る資料にすぎず、改善の必要の有無や改善策は教員が自己省察的に判断し、対策を採ることに負かされる。改善されたのかどうかは学生にも他の教員にも不明なままである。

授業評価に関する研究報告(鈴木)³⁾では、学生たちが「望ましい」と考える授業の大きな構成要素は教員に関する因子であることが多く報告されている。Voiceの結果を見ても、学生たちは少人数の選択科目やゼミナール、あるいは専攻科では評価が高い。授業に満足感を持っていることは、如実にそれが現れていると考えられる。教員もまた、小人数の授業や演習科目では学生一人一人と密に関わり丁寧な指導を行なっている。教員自身も満足感を得られている。看護学科の3年生は、実習が年間授業の大部分を占めていることから、教員との個別の関わりが増えるため、2年次で下降した教員への評価が回復しているのはそのことの現われとも考えられる。教員との関係に満足感があると授業評価も高くなる傾向は、どこの大学でも見られている。授業評価は、授業内容や方法の評価であるべきであるが、

最終的には学生と教員の関係の評価になっている感が否めない。授業評価を行う目的は単一ではないが、授業改善としての、学生と教員間、あるいは教員相互のコミュニケーションツールとしての役割もある(澤田⁴⁾)。

本学は全学科が資格取得に関わる学科である。資格取得のための必修科目が殆どであり、授業の良し悪しにかかわらず、受講せざるを得ない状況である。授業内容もまた、指定規則に準じたものとして組み立てられている。短期間の中で、教員は資格取得に必要な内容を含めながら、且つ教員自身が伝えたい内容を組み入れる。その為、学生たちにとっては身に付けるべき内容が大量になり負担感が増していることもあり得る。ほぼすべての科目が必修であり、全員が同じ講義、演習を受講する。その際も教員はひとりで学生に対応することが多い。定員60名から100名の学生が受講する科目では、学生全員の理解度を教員が把握して授業を進めることには困難が生じる。加えて、教員は講義以外の校務もあり学生たちのフォローに十分な時間が持てない現状もある。

学生たちは期待を持って入学してくるが、実際には学ぶべき科目と知識、専門職としての技術が予想以上に多くあり、専門用語も多い。それらが講義内容の理解を混乱させ、結果、授業評価につながることも考えられる。加えて、効果的な授業の展開には学習環境も必要な条件である。そこには大学の施設設備や学生への福利厚生、例えば校舎の使用範囲や使用時間への配慮なども欠かせない。近年の教室のOA化も考えるべきである。

今回の意識調査では、学生たちは期待をこめて、Voiceには真剣に答えてくれているが、その効果は懐疑的であることがわかった。教員も、教えやすい科目、教えにくい科目はある。すべての科目の評価を同じように受け止めているわけではないこともわかった。そして、学生にとって授業評価は、単なる教員の授業評価だけではなく、自己の学習評価になることも踏まえ、多面的な視点で考えるように伝えてゆくことも必要である。授業評価の改革に対しては、一部学生は参加の意欲を示している。これらの学生の意欲を反映させていけるような授業評価の方法を検討する必要がある。授業評価を行うことは定着しているが、授業評価を組織的に生かしていくことの必要性が明らかになった。

7. 結論

本学における授業評価の現状から以下のことが検討課題としてあげられる。

1) 学生はVoiceにきちんと答えているが、その

結果が授業に反映されているとは感じていない。

- 2) 教員の Voice の受け止めは概ね真摯にみているが、必ずしも改善の手がかりとはなっていない。
- 3) 学生も教員も Voice の変更を期待する声がある。学生は少数ではあるが Voice の作成に参加する機会があれば参加したい意向を示しておりこれらの学生と共同で行うことは新たな効果が期待できる。

状と課題一」『京都大学高等教育叢書』21
p. 203-228

8. 終わりに

「学生による授業評価」は大学設置基準の中で義務付けられている。本来は学生に対しての教育の質向上、授業改善のための手段として導入されたものであるが、外部評価が義務付けされたことで自己点検評価の「根拠資料」として活用する志向が強くなってきていることは多くの大学が感じている^{5) 6)}。つまり、改善より説明責任としての遂行が重視され、セレモニー化している現状がある。

今回、学生が授業評価をどのように受け止めているのか、教員はどのように受け止めているのか、本学の状況を改めて確認した。学生たちは授業評価に不透明感を強く抱いており、それは授業への不満感にもつながる。学生の声に答えられる、本来の授業評価のあり方について、教員個々の取り組みはもちろんであるが、大学として組織的な改革もまた必要である。

本調査は平成 27 年度の FD 委員会活動の一環として行ったものである。

文献

1. 文部科学省高等教育局 大学振興課大学改革推進室 (2011)：大学における教育内容の改革状況について
2. 松谷 満、平井 松牛、佐竹 昌之他 (2005)：「全国共通教育の現状と課題—学生による授業評価アンケートの分析から」、徳島大学開放実践センター『大学教育研究ジャーナル』第2号 p. 13-25
3. 鈴木 牧彦 (2013)：「学生による授業評価アンケートの活用に関する意識調査」調査結果、
www.kitasato-n.ac.jp
4. 澤田 忠幸 (2010)：学生による授業評価の課題地展望、愛知県立医療技術大学紀要 第7巻 第一号、p. 13-19
5. 米谷 淳 (2007)：学生による授業評価についての実践的研究、神戸大学・学位研究 第5号 p. 123-133
6. 松下 佳代 (2005)：「学生による授業評価—現

資料1 学生用アンケート

学生各位

学生の皆さんには授業終了時の Voice にご協力いただきありがとうございます。Voice につきましては、平成 5 年より全国の大学に先駆けて実施してまいりました。皆さんの声を先生方に伝え、授業改善に役立てるように始めたものです。現在実施している Voice は適正に行われ、授業改善に役立っているのか、ということを確認することにし、Voice についての学生のみなさんの意見を聞かせていただきたくアンケートを行うことといたしました。今後の Voice や授業改善の一助とし、松本短期大学の教育の質の向上のため、ご協力をお願い申し上げます。

FD 委員会

以下に 12 の質問項目があります。解答欄の中から当てはまる場合は【はい】、当てはまらない場合は【いいえ】を○で囲んでください。どちらも当てはまらないと思われる場合でも、近い方を選んでください。

1. Voice の説明はされていますか。 【はい】 【いいえ】
2. Voice をとることは意識していますか。 【はい】 【いいえ】
3. 毎回の Voice にきちんと答えていますか。 【はい】 【いいえ】
4. Voice をとることに負担ありますか。 【はい】 【いいえ】
5. Voice は授業改善に役立っていると思いますか。 【はい】 【いいえ】
6. 学生は Voice を真剣に答えていると思いますか。 【はい】 【いいえ】
7. 教員は Voice の授業評価を受け止めていると思いますか。 【はい】 【いいえ】
8. 学生の声は Voice でなくても良いと思いますか。 【はい】 【いいえ】
9. Voice の質問項目は適切だと思いますか。 【はい】 【いいえ】
10. Voice を取ることで授業を振り返れると思いますか。 【はい】 【いいえ】
11. Voice の作成に参加したいと思いますか。 【はい】 【いいえ】
12. Voice や授業などについて希望がありましたらお書きください

最後にあなたの所属学年を教えてください。

【1 年生・2 年生・3 年生/専攻科】

ご協力ありがとうございました

資料2 教員アンケート

専任教員各位

日頃は、FD 活動にご協力いただきありがとうございます。Voice につきましては、介護福祉学科開設より実施してまいりました。結果に着きましても先生方に評価していただいておりますが、現在実施している Voice が適正に行われ、授業改善に役立っているのか、という懸念が FD 委員会で取り上げられました。そこで、初心に帰るべく Voice についての学生・専任教員の意見を聞かせていただきたくアンケートを行うことといたしました。お忙しい中、恐縮ですがご協力いただき今後の Voice や FD 活動・授業改善の一助とさせていただきたくお願い申し上げます。

FD 委員会

以下に 12 の質問項目があります。解答欄から当てはまる場合は【はい】、当てはまらない場合は【いいえ】を○で囲んでください。どちらも当てはまらないと思われる場合でもより近い方を選んでください。

1. Voice をとることは、意識していますか。 【はい】 【いいえ】
2. Voice の集計結果は真摯に見ていますか。 【はい】 【いいえ】
3. 複数科目の場合、科目によって受け止め方に違いはありますか。 【はい】 【いいえ】

3-①へ ←
- 3-①具体的な科目の違いを教えてください。
4. Voice 以外の方法で授業評価を行っていますか。 【はい】 【いいえ】

4-①へ ←
- 4-①具体的な方法を教えてください。
5. Voice の結果は授業改善に役立てていますか。 【はい】 【いいえ】
6. Voice を取るのは授業の最終回で良いと思いますか。 【はい】 【いいえ】
7. Voice をとることに負担を感じますか。 【はい】 【いいえ】
8. 学生の声は Voice でなくても良いと思いますか。 【はい】 【いいえ】
10. ご自身の授業の方法は効果的に行っていると思いますか。 【はい】 【いいえ】
11. 現在の Voice は改善した方が良くと思いますか。 【はい】 【いいえ】

12 へ ←
12. 改善点についてご意見をお知らせください。

ご協力、ありがとうございました。

資料 3-1

問 1 2 VOICE や授業等について希望がありましたらお書きください

< 1 年生 >

1. VOICE の質問項目は適切だと思いますが、アンケート用紙に問題があると思う。教員の授業に関する項目で回答に「その他」がありますが、具体的な内容を書いて明確にさせた方が問題がわかると思う。
2. 大部分の先生はわかりやすく丁寧に授業してくれるのですが、特定の先生はあまりにも授業に体する姿勢が不適當だと思う。
3. 授業評価をうけとめてくださるのを願っています。
4. うるさい人をどうにかしてほしい
5. Voice に備考欄を作してほしい
6. ホワイトボードを使う授業でのマジックが薄すぎると思う。新しいものを使うなどしてもらいたい
7. 上の名前とか書く四角が小さい
8. ボイスに改善する文章を書ければ良いと思う

< 2 年生 >

1. 意見や思いを書いたとしても、その後の授業に反映されている様子もあまり無く、ボイスをとっている意味があるのか・・・という授業もある
2. ボイスは聞かれてることを答えるだけで、学生の、先生の授業に対する思いは何もかけない。ボイスでは学生の声は先生には伝わらない。
3. 改善点などを自分の字で書けるようにするといいと思う
4. テストの後にボイスしてほしい
5. 希望者だけで良いと思う。学長がアンケートを回収し、その教員への指導をしっかり行ってほしい。質問が簡略すぎて、先生に思いが伝わらない。自由に書ける「その他の意見」等のコーナーを設けてほしい。
6. ボイスをとることによって、先生も生徒も授業の振り返りや反省点がみえてきていいと思う。
7. 教員といえど人間なので、そう変わったりしないと感じるが、ボイスをとったところで、どう授業が変わったのかわからない。本当に教員が注意しながら授業の改善に挑んでいるのか信用出来ない。
8. マイクの音量が小さかったり、スライドがみえにくい
9. 少人数制で授業をした方が、密な授業が出来るのではないかと感じる
10. ボイスをとった後、その先生の授業が改善されているように思ったことはありません。もう少し授業中うるさい生徒への注意を促すといいと思う
11. 先生方はみんな自分が正しいと思っているからボイスで指摘したとしても受け止めてい

資料 3-2

- ないし、言っても「でも」と否定される。ゼミ担は自分のゼミをしっかりと管理してほしい
12. 先生たちのただの意見ボックスなだけで、変化が見られない。具体的な問題点を伝えられない
 13. ボイスを行っても先生の授業がわかりやすいと感じるようになったことがないので、きちんとした授業を行ってほしい
 14. ボイスの結果がどのように処理され、教員に伝えられているのかについて説明されていないので、よくわからない
 15. ボイスがどう使われているのか説明があっても良いのでは。具体的なシステムを理解した上で書いた方が良いと思います 授業の悪いところが指摘出来ないのがボイス
 16. 意見を書ける場所が欲しいと思いました
 17. 自由記述の欄があるといいと思う
 18. 自由記入欄があるといいと思う
 19. 担当教員が複数の場合、回答に困るので改善してほしい
 20. 先生が2・3人で担当している科目の評価がつけにくい
 21. 授業に反映されたことがありません
 22. 担当教員が複数名いる場合、誰のことを書けば良いのかわからない
 23. 外部講師への評価があまり反映されてないと思う
 24. 教えてくれる先生が1科目につき、沢山いるのにボイスが1枚ではおかしい。先生によって教え方は違うので1枚ずつ必要
 25. ボイスを書いても希望が伝わると思えない
 26. 復習や思い込みの改善のためにテストは返却してほしい
 27. 学外・外部の先生と学内の先生とのボイスをしっかりと分けて欲しい
 28. ボイスをテストの時にとるのではなく、最後の授業の時にしてほしい
 29. 授業内容に見合ったテストにしてほしい
 30. マークシート以外にフリー記入ができてもいいと思います。
 31. 項目を減らすのはどうでしょうか